

右へくぼみ入のいとまなし、唐土なども、繪圖を以て考ふるに、洞底湖、青草湖、杯、すべて湖といふ者、則越後の瀉と同じ趣なり、此所に、皆長江に傍て湖あり、北方の地は、地面に高下ありて、山多く險岨なるゆゑに、黃河に湖ある事なし、日本にては、只越後のみ瀉あり、其他には無し、但し出羽の八郎瀉、常陸の霞浦、杯、少し似たれども、其實は又異なり、

播磨國  
明石瀉

〔萬葉集六雜歌〕山部宿禰赤人作歌一首并 歌○中略

反歌三首○二略

明方潮干乃道乎、從明日者、下咲異六家近附者、

筑前國  
香椎瀉

〔萬葉集六雜歌〕冬十一月○神龜五年、太宰官人等、奉拜香椎廟、訖、退歸之時、馬駐于香椎浦、各述懷作歌、

帥大伴卿人○旅歌一首

去來兒等、香椎乃瀨爾、白妙之袖、左倍所沾而、朝榮採手六、

大貳小野老朝臣歌一首

時風、應吹成奴、香椎瀨潮干、瀨爾、玉藻、苜而名、

豐前守宇努首男人歌一首

往還、常爾我見之、香椎瀨、從明日後、爾波、見緣、母奈思、

薩摩國  
薩摩瀉

〔平家物語二〕卒都婆ながしの事

康賴入道は、あまりにこきやうのこひしきま、に、せめてのはかりごとによ、千本のそとばをつくり、阿じのぼじ、ねん號、月日、けみやう、實名、二首の歌をぞ書つけける、

さつまがた沖の小島に我有とおやにはつけよやえのしほ風